

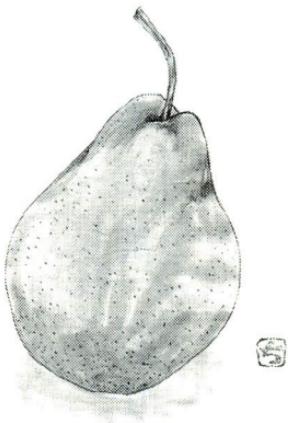
みめぐみの

第31部



みめぐみの

第31部



大谷光道著

目次

読者の貢特集

はじめに 2

質疑応答

質問一・性善説? 性悪説 4

仏教では

質問二・往生はいつ?

往生とは?

「得」と「獲」

「得る」とはどういうことか
まとめ

23

20

18

14

10

6

4

感想意見

あとがき

お知らせ

30

29

27

『白萩の道』

読者の貢特集

はじめに

先頃、政権を投げ出したと非難された安倍首相が、「参議院で施政方針演説の一部分を読み飛ばした」と報道されました。テレビなどで見ると、原稿を前もって準備して、ほとんど読み上げているように見える施政方針演説ですら、こんなことがあります。

私は、お話ししながらいつも、「聞き手次第で話の中身はどんなにでも変わるものだ」と、実感してきました。私の計算通りのところで聴衆に笑つて

もらえないとか、無反応の顔つきに囲まれると、この安倍首相のように話が縮んでしまいます。また、聞いている人の笑顔、笑い、頷きは、話している私を元気にするだけでなく、事前に私が頭の中に準備していたものには全くなかつた、新しい話を作り出す力にもなり、話を盛り上げることになります。それでもむしろ、「聞いている人が、私の代わりに話しているのではないか」と思うことすらあります。このように、話というものは、生き物なのです。

本も同じで、「本を書く前に、どんな人が読んでくれるのか、読んでくれる人の顔が浮かんでもないと、本は書けない」のはもちろん、「読んでいる人が、書かせている」ようなところも多分にあり、その意味からも「読者の貢」は、本誌を「生き物」とする上で、なくてはならぬ役割を担つてきました。

これに加えて今回は、短いお答えではすまない二つの質問をいただいたので、これを中心に「読者の貢特集」とすることになりました。

質疑応答

質問一・性善説？性悪説

これは、前頁でも触れたように、読者のご質問に触発されたもので、ふだんは仏教や真宗のお話をするのにはあまり考えたことのなかつた、別の視点を持つ必要を教えてくださつた質問です。

質問

神奈川県相模原市 豊田 稲さん

二河白道の考へ方 正しく人生の生き方ですね。

人間は ○性善説でしょうか、

○性悪説でしょうか。

人間の本性は善なのか、悪なのか。

性善説と言えば、儒教の中心となる考え方で、

「人間は善を行なうような本性を生まれ付けてゐる。それでも悪を行なうのは、この本性が汚されたり隠されたりすることによるからだ。」

と説いたのが、かの有名な孟子もうし（紀元前三七二—一八九）です。

これに対して、

「人間の本性は利己的な欲望で、自然のまま放つておくと社会を破滅させてしまう。善は生まれてから後に身につけるようにしなければならない。」と、性惡説を説いたのが、同じく儒教の荀子じゅんし（紀元前二九八—一二三八頃）でした。

しかし、性善説・性惡説については、儒教に限らず、また古今東西を問わず、いつも議論に持ち上がるところです。

そんな中で、たとえば性善説が正しいとして、「何もせぬ放置しても人間は悪いことはしないものなのだから」と野放しの樂天主義でいいのか、逆に性惡説によつて、「人間は良いことをすることは全く期待できないもの」とし

てしまつていいのか、という「程度の問題」も出できます。

いや、それ以前にそもそも、「何をもつて善と言い、何をもつて悪と言うのか」という善惡の基準、つまり「物差しをどこに当てるのか」をはつきりさせないと、議論が混乱するばかりです。それで、何か一つの善惡について議論の基準を決め、その物差しを当てたとき、人間が生まれ付き持つている素質が善だということになれば性善説、悪だということになれば性惡説を探ることにすれば、混乱は起こらないと思います。

佛教では？

そこで、お尋ねの趣は「佛教では？」ということで、佛教が性善説に立つのか、性惡説に立つか、ということをお知りになりたいのだと思います。それで、以下、「佛教」を前提に話を進めましょう。

佛教は道徳を説くものではないので、おのずと、この孟子や荀子の場合と

は当てる物差しが違ってきます。

言うまでもなく、仏教の目的は「覚りを開く（成仏する、仏になる）」ことです。したがつて、覚りを開くについてプラスになる行いを善、マイナスになる行いを悪という見方に立つて物差しを当てるになります。そのため、人間は、覚りを開くについてプラスになる素質、役に立つ素質を持つているというならば性善説、マイナスになる素質、障害（邪魔）になる素質しか持っていないというならば性悪説、ということになります。ただし、覚りを開くことは私たちの内面の問題なので、この答えが性悪説だつたとしても、それが直ちに他人に迷惑を掛けたりすることにはなりません。この点、政治・道徳を説く儒教の場合などとは大きく異なります。

仏教を大きく分けて聖道門と浄土門があることは、いろいろな角度から何度もお話ししてきましたが、ここで念のため整理しておきます。聖道門は聖者の教えで、聖者とは覚りに至るための困難な修行にも耐えられる人のこと

です。そして大聖（だいしよ）（お釈迦様）と同じように、修行の道を歩むことのできる人のための教えなので「聖道門」と言うのです。これに対し、浄土門は主として凡夫のための教えです。凡夫とは聖者とは反対に困難な修行に耐えない、親鸞聖人のお言葉で言うと、「いざれの行も及びがたい者」のことです。凡夫が阿弥陀様のお力（本願力）によつて極楽（浄土）に往生して成仏（覚りを開く）させていただく教えが浄土門です。

さて、聖者が修行によつて成仏を目指すのは、自分自身の中に成仏できる素質があると確信しているからです。これは、一見普通の石に見える宝石の原石も、不要な部分を削り落として磨き上げれば美しい宝石になるのにたとえられます。このような成仏できる素質、つまり仏になる種のことを「仮性」（げうじょう）と言い、聖者は自分の仮性をあてにして修行に励むのです。

一方、自分の中にこのような仮性——今のたとえで言えば宝石——を見出しが出来ないのが凡夫です。親鸞聖人がご自身のことを「いざれの行も

及びがたき身」と仰るのは、「どのような修行も身に付かない」と告白をされたお言葉で、「仏性を持たないから修行が身に付かない」ということです。「親鸞聖人ほどの方が仏性をお持ちでなかつたなんて……」と驚かれるかも知れません。聖者であるか凡夫であるか、つまり仏性を持つているか持っていないかは、客観的に明らかに、つまり他人が見てわかるようなものではなく、あくまで主観的な、本人だけの自覚・認識によるものです。したがって、聖道門を志して道を求めるか、浄土門で阿弥陀様のお心をいただくかは、自分で決めるしかないのです。親鸞聖人が比叡山を下りて六角堂に百日間の参籠さんろう（御籠り）をされ、浄土の教えを求めて法然上人の許もとへ走られたのも、厳しくご自身を掘り下げられたからにほかなりません。

以上のお話で結論が見えてきました。仏教には性善説と性悪説の両方があり、聖道門は性善説、浄土門は性悪説であると言えるでしょう。

〔以下次号〕

質問二・往生はいつ？

次は『第二十九部』についてのご質問なのですが、あるいは、私の説明にわかりにくい部分があつて、内容が通じていなかつたのではと、心配になりました。それでこここのところ、まことに重要な問題なので、一層理解を深めていたぐためにも、『第二十九部』のお話をもう一度角度を変えて述べてみたいと思つたものです。

いつもお話しするように、「やがてこの世の命が終わつたら、阿弥陀様の極楽に往生できる」という予約切符を、生きている今いたぐ」というのが、浄土真宗の基本です。このご質問は専門用語がいっぱい並んでいて一見むつかしそうですが、「即得往生」そくとくおうじょう 「不体失往生」ふたいしつおうじょう 「大安心」だいあんじん 「不退転」ふたいてん はすべてこの「予約切符」を指すことばだとお考えの上、「難しい」と思わず、安心して読み進んでください。なお「念佛往生」は、この予約切符を持つてい

る人が往生することを言います。

質問

富山県南砺市 河合寛さん

『第二十九部』に即得往生のことが『唯信鈔文意』や『末燈鈔』から書かれていてよく分かります。『口伝鈔』に言われている不体失往生も、念佛往生の事実として頂いてよろしいでしょうか。

念佛往生をさせてもらった以後の生活は大安心となり得るから不退転であると感じているのですが、いかがなものか、一言御教えをお願い致します。

南無阿彌陀仏

合掌

「不体失往生」というのは、覚如上人が『口伝鈔』に説かれているもので、その字のごとく「体が失われないうち」つまり「生きている間」に往生が決まるという意味です。つまり「生きている今、往生の予約切符をいただく」ということです。お尋ねの通りで、この不体失往生の人は、やがてこの世の

命を終えると、念佛往生する（阿弥陀様をたのみ、念佛して極楽往生を遂げる）ことになります。

次に、念佛往生ができるという往生の予約切符をいただいた後は、信心（安心）^{あんじん}の生活となり、それ以前の（信心のない）生活に後戻りしない（不退転）のですから、ご質問の「大安心……感じているのですが」は、この通りで結構かと思います。ただ、「安心」に「大」を付けるのはあまり聞いたことがありませんが、後に述べるように、信心の喜び故のことだと思います。

それはともかく、

念佛往生をさせてもらつた以後の生活は

の、の、のところをお気をつけいただきたく、ここが私の心配になつたところです。

というのは、この表現だと、

（この世で）往生して、それ以後、大安心（不退転）の生活となる

と、読めてしまう**おそれ**があるからです。

なぜ、そのように読めるかというと、「大安心」「不退転」は現世での生活なので、それ以前にこの世で往生してしまったことになるからです。そうなると、『第二十九部』で私が問題にした、最近の真宗大谷派執行部の往生及び成仏についての考え方につきわめてよく似た信仰になつてしまふからです。

ここでもう一度、『第二十九部』の「ご挨拶」を要約しておきましょう。

一、前住・闡如上人は、生涯をかけて伝統の教えを守り、後世に確實に正しい教えを伝え、残していくかねばと、ご苦労を重ねられ、そのご遺志を承けての本願寺の嵯峨野移転であつた。

二、そもそも、「紛争」と呼ばれたものの根本原因は、表面にはほとんど出ることのなかつた、真宗大谷派執行部が導入しようとした新しい教義と伝統の教義との相違であつた。

三、その教義上の相違で最も重要な問題は、次の三点である。

		闡如上人（伝統）	真宗大谷派執行部
1	いつ、往生が決まるのか	平生（今）	平生（今）
2	いつ、どこへ、往生するのか	死後、極楽へ	今、ここ
3	いつ、どこで、成仏するのか (覚りを開くのか)	死後、 極楽で	?、?

往生とは？

「往生」とは「往^いつて生まれる」ことで、どこへ行くのかと言えば、言わざと知れた「阿弥陀様の極楽浄土」です。この往生を説くのが浄土門で、浄土真宗ももちろん浄土門の一宗旨です。

では、いつ行くのかと言えば、「この世の命が終わって後」で、これを露^ろ骨^{こう}に言えば「死んでから」ということです。しかし、「死んでから」という表現がきつすぎるため、「この世の命が終わって後」という言い方をすることがよくあります。

私たちは、信心をいただくことによつて、信心をいただく前（信前）といただいた後（信後）とでは、物事の見方、とらえ方、感じ方、対処のし方など、色々な面での変化が起ります。その信心の中身は「命終わつて後（死んでから）阿弥陀様の極楽に往生させてもらえるという安心感」ですが、将来の行く先が永遠の淨土であると心が決まるので、このような変化が起こつて当然です。

同じようなことは、日常の些細な事柄でも私たちは経験しています。たとえば、何か疑いをもつている事柄があつたとして、それが何かのきっかけで信用できることになつたとき、今まで敵視していたものが味方に変わるのですから、つまり視野が一八〇度変わるのでですから、その心境の変化たるや、たいへんなものです。日常の些細な事柄でもこれですから、生まれ変わる先が極楽と決まるとなると、これとは比べものにはならない喜びと共に、視野が大きく変わります。

そこで、もし、

「信前の私が死んで、信後の新しい私が生まれるのだ。この生まれ変わった新しい私の日常（生活）を往生というのだ。往生というのは、何も死んでからのことではなく、生きている今往生するのだ。」

という考え方が出でてくるとしたら、それは大きな間違いです。

自分では生まれ変わつたつもりかもしれません、周りの世界は相変わらず前のままで。そこが極楽であるはずがありません。それよりも何よりも、とにかく、次の問い合わせに対する答えはちゃんとできるのでしょうか。

「あなたは、いつの日か実際に死ぬでしょう。その時、どこへ行くのですか」

また、浄土真宗では往生即成仏、つまり往生と同時に成仏する（仏になる、覚りを開く）と教えられているので、もし仮にこの世で往生するとなると、その時は成仏の時でもあります。成仏すれば当然煩惱はなくなるので、次の

問い合わせ、いや、だめ押しは、

「あなたは、煩惱はなくなつたのですね」

となります。

以上でおわかりのように、自分の頭の中だけでの納得を求めて極楽を手許に引き寄せようとすると、こんなことになります。

なぜこんな迷路に入ってしまったのでしょうか。

浄土真宗では、信後の状態、正しい他力の信心をえた状態を、「正定聚」

と言います。この状態になると、二度と元の信前の状態には戻らないので、これを「不退転」とも言います。この正定聚・不退転の状態は、死後の往生を約束された状態で、わかりやすく言うと「往生の予約切符を手にしている状態」です。したがって、まだ成仏（覚りを開く）したわけではないので、煩惱については信前同様、無くなつていられない状態です。

正定聚（往生の予約切符）と往生の区別がはつきりしていれば、このよう

な迷路に入らなくてすむことがおわかりでしよう。

「得」と「獲」

さてそれでは、以上のことが私の独りよがりでないことを示しましょう。まず、親鸞聖人の『自然法爾章』によつて、親鸞聖人がどのような字の使い分けをされていたかを伺つてみます。

「獲」^{ぎやく}の字は、因位^{いんに}のときうるを獲といふ。

「得」^{みよう}の字は、果位^{かい}のときにはいたりてうることを得といふなり。

「名」^{みょう}の字は、因位のときのなを名といふ。

「号」の字は、果位のときのなを号といふ。（以下略）『自然法爾章』

因位	未だ修行中で、成仏していない菩薩などのような地位	える	なづける
得	圓満具足した仏果（成仏）の地位	獲	名
号			

「える」や「なづける」の意味で用いられるこれらの字ですが、聖人は因位と果位とではつきりと区別をつけられていることがわかります。したがって、私たちは、このことをよく念頭に置いてお聖教(レヨウキョウ)（聖典）を読まないと、とんでもない間違いを犯してしまうことになります。

さて、闡如上人が『御消息』(ごじょうぞく)で間違いを指摘されているように、現世（生きているうち）の往生を言う人は、

即得往生（『仏説無量寿經』、略して『大經』）

を引き合いに出して、

即得往生＝すぐ往生をえる

だから、「信心をえたとき、今すぐ往生するのだ」と解釈しようとします。

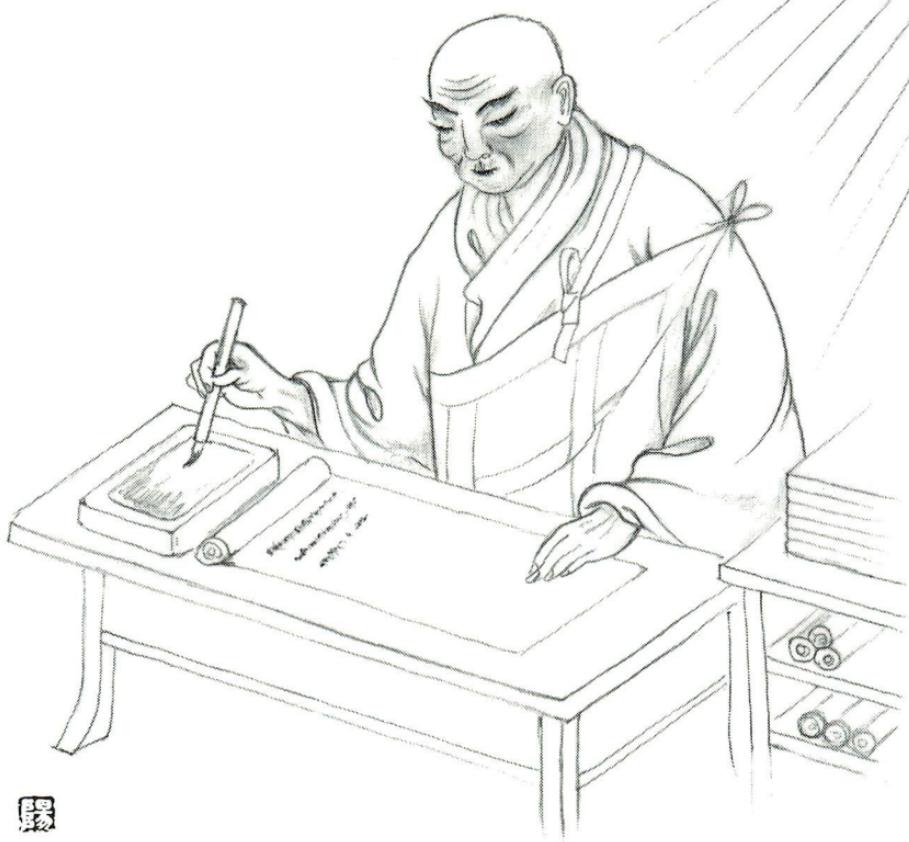
ところが、「得」は「果位である」ことを表す字なので、「信心をえた今、往生をする」ではなく、果位すなわち「成仏するときに、往生をする」と読まなければなりません。もし、「信心をえた今、往生をする」のならば、

「即獲往生」でなければならぬことがわかります。したがつて、「やがて（死後）往生・成仏できる予約切符を、今もう（正定聚、不退転）のだ」ということが、この『自然法爾章』のお示しによつてもわかります。

「得る」とはどういうことか

また、「即得往生」の説かれているのは、『大經』の「第十八願成就の文』（四十八願の中心となる第十八願が成就したことが説かれている部分）のところで、これは淨土真宗の要中の要となる大切なご文です。親鸞聖人は『一念多念文意』を著され、その中でこのご文を懇切丁寧にお説きくださっています（本文末尾）。いま、その中の「即得往生」の部分について意訳してみましょう（末尾の本文の傍線①）。

『「即』は「すぐ」ということであり、「位に就く」ということでもある。眞実信心をえることによつて、阿弥陀様のお心のうちにおさめむかえとられ



親鸞上人

るのである。そのとき同時に、正定聚の位に就いて定まるのを、「往生を得る」と仰っているのである。』

これは要するに、

信心をえる॥正定聚の位に就く॥往生を得る

ということです。つまり、「往生を得る」というのは「今、往生する」という意味ではなくて、ごく平たく言つてしまえば、「やがて往生ができる権利を、今、手に入れる」という意味だということがわかります。そして「即」というのは「信心をえてすぐ正定聚の位に就く」の「すぐ」であつて、「すぐ往生」の「すぐ」とは結びつかないこともわかります。

また、この少し前の部分に「信心歡喜」のことが説かれていました（末尾の本文の傍線②）。

『「歡喜」というのは、「歡」は身をよろこばせるのであり、「喜」は心によろこび起こさせるのであり、きつとえることになつていてることをえてし

まおうとするのだと、前もって早くからよろこぶ心である。』

「うべきことをえてんず」を直訳すると、このようにわかりにくいくことになりますが、要するに「間違いなく往生できる」と、それが着実に近づいてくる実感を表現なさつたおことばです。

蓮如上人も『お文・一帖目一通』に、

うれしさをむかしはそでにつつみけり　こよひは身にもあまりぬるかな
と、歌を引いて、信心をいただいたときの思いは「そつと袖に包んでしまつ
ておくようなものではなく、身の置き所もなく躍り上がるほどに嬉しさが身
に余るものだ」とお示しです。

まとめ

先の「因位と果位とによつて使う字を区別する」というお示しと、また、
この『一念多念文意』を伺つて、往生と正定聚について、より深く味わつて

いただけたことと 思います。

浄土真宗では、古来、

現生正定 現生（現世）で信心を獲たとき、正定聚の位に就く（往生の予

約切符をもらう）

彼土（極楽・淨土）で、覺りを開く

信心正因 往生・成仏の正しく因（種）となるのは、信心である。

称名報恩 称名（念佛を称える）は、仏恩報謝のためである

という四つの原則を言います。

ここでは、はじめの二つの原則についてお話ししました。この四つの原則が教えのすべてというわけではありませんが、浄土真宗の教えの柱としてこの四つの原則を念頭に置いておかれることをお勧めします。そうすれば、教えの大枠から外れることはまずありません。

このお答えは、正定聚のお話が中心になりましたが、正定聚こそ浄土真宗の要です。「いずれの行も及びがたい凡夫」が、煩惱にまみれたまま、阿弥

陀様と一緒に生活し、死後の往生という至上の済いを約束されるのが、正定聚なのです。

はじめに列記した「即得往生」「不体失往生」「（大）安心」「不退転」に加えて、「正定聚」「平生業成」^{へいせいぎょうじょう}「信心」も、すべて「予約切符」を指すことばです。これら専門用語の中でも、この際、「正定聚」だけは、是非とも覚えておいていただきたいと思います。

以上、ご質問の中でお聞きになりたかったこと以外に一部気になるところがあつて、お気をつけいただきたく、これは教える根幹に関わる問題なので、詳しく述べました。

ご質問い合わせた河合さんは、本誌をいつも熱心にお読みくださり、ご意見・ご質問をお寄せくださいと思われた部分があつたとして、今回のお答えで、それをクリアすることが出来たとすれば、まことに幸いです。

読者の皆様、今後もどしどしご質問をお寄せください。

『一念多念文意』より
『無量寿經(下)』のなかに、あるいは「諸有衆生」が「聞其名号」して「信心歡喜乃至一念」して「心回向」、「願生彼國」即得往生、「諸有衆生」といふは、「十方のよろづの衆生と申すところなり。」「聞其名号」といふは、「本願の名号をきくとのまへるなり。」きくといふは、「本願をききて疑ふところなきを」「聞」といふなり。またきくといふは、「信心をあらはす御のりなり。」^②「信心歡喜乃至一念」といふは、「信心」は、如來の御ちかひをききて疑ふところのなきなり。「歡喜」といふは、「歡」は身をよろこばしむるなり、「喜」はこころによろこばしむるなり、うべきことをえてんずと、かねてさきよりよろこぶところなり。「乃至」は、おほきをもすくなきをも、ひさしきをもちかきをも、さきをものちをも、みなかねをさむることばなり。「一念」といふは、「信心をうるときのきはまりをあらはすことばなり。」「至

心回向」といふは、「至心」は眞実といふことばなり、眞実は阿弥陀如來の御こころなり。「回向」は、本願の名号をもつて十方の衆生にあたへたまふ御のりなり。「願生」は、よろづの衆生、本願の報土へ生れんとねがへとなり。「彼國」はかのくにといふ、安樂国をしへたまへるなり。^①「即得往生」といふは、「即」はすなはちといふ、ときをへず、日をもへだてぬなり。また「即」はつくといふ、その位に定まりつくといふことばなり。「得」はうべきことをえたりといふ。眞実信心をうれば、すなはち無碍光仏の御こころのうちに摂取して捨てたまはざるなり。摂はをさめたまふ、取はむかへると申すなり。をさめとりたまふとき、すなはち、とき・日をもへだてず、正定聚の位につき定まるを「往生を得」とはのたまへるなり。



感想 意見

神奈川県相模原市 山本誠子さん

（第二十七部によせて）

旅人「私」は戻つても死、留まつても死、進んでも死、仏法の信心を持つ
というのは心にしつかりとした正しい芯をもつことで真の幸福であるという
ことです。

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

東京都武藏野市 鈴木健太郎さん

（第二十九部によせて）

闡如上人の御消息は難しい内容ですが実に味わい深く、繰り返し拝読いた

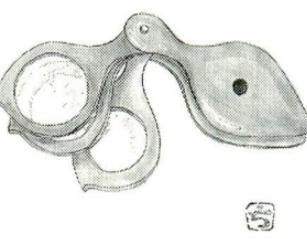
しました。嵯峨野への御遷座と宗教法人の認証を闡如上人もお浄土でさぞかしお喜びのこととお察し申し上げます。

平成十九年三月二十六日

(第三十部によせて)

「三途の川」という言葉は知つておりましたが今まで「三途」とはどういう意味か、まったく知らず、考えたこともありませんでした。今回おかげ様で三悪道の火途、血途、刀途が三途だと初めて知りました。

巻末の女性自身の記事のおかげで買いそびれていた内容を手元におけるようになりました。往生とはどういう意味かを女性自身の読者に読んでもらうことがとても意義のあることだと思います。



あとがき

みめぐみの刊行委員会

二回続いております「阿弥陀様と本願」はお休みとなり、質疑応答を中心とした「読者の貢特集」です。「阿弥陀様と本願」は次号からまた再開となる予定です。

これまでにも何度か質疑応答の形で誌面を割いて頂きました。今回は、一題目は「人間の本性」を一般論から仏教の観点へ掘り下げ、二題目は質問から膨らませて、時期を間違えやすい念佛往生の要について改めて説いて下さいました。

光道台下も巻頭にお書き下さっていますが、読者の皆様からの投稿により本誌はより元気な“生き物”になつていきます。皆様の一層のおたよりをお待ちしております。

お知らせ

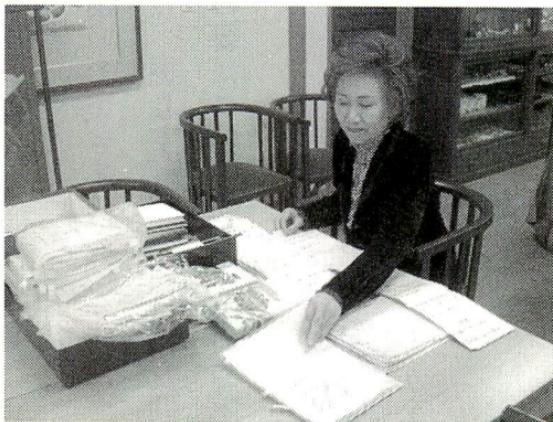
みめぐみの刊行委員会

此の度、大谷智子前裏方のご生誕百年を記念して、前裏方の短歌を集めた『白萩の道』が刊行されます。

前裏方は請われるままに色紙や短冊に歌をし
たためて差し上げておられましたが、他のほと
んどの歌は今日まで人の目にふれずに來ました。

光道台下は「これら『よそ行き』ではなかつ
た歌たちは、さながら七十年以上にわたる母の
『心の日記』を織りなしています。この歌集が多くの方々に読まれることが出来
れば、残された者としてこれ以上の喜びはありません。」と、語られます。
皆様にご購読をおすすめします。

お問い合わせは本願寺寺務所まで。



本願寺寺務所で編集作業をされる禮子裏方

—大谷智子歌集—『白萩の道』

大谷智子裏方の短歌を集めた歌集『白萩の道』が刊行されます。お裏方は12歳のころから晩年まで、師について短歌を熱心に学ばれ、2000首を超える歌を残されました。



その中から約800首を選び出し、①大正の少女時代 ②結婚後終戦まで ③戦後から熟年期 ④晩年期、という四つの時代に分けて4章の構成としました。それぞれの章にその時代の

思い出深い写真も収載しています。また、カラーポ絵には、お裏方が描かれた絵、色紙、扇面などの一部が収載されています。故人のご生誕100年を記念し、この11月に刊行の運びとなりました。

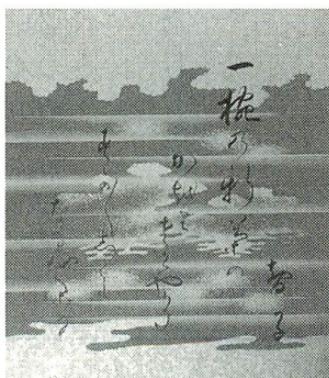


林中花
よきひとにめ
はなにむかひぬ
こゝちしてはやし
かひぬの
あひぬ
のる



発売 2007年11月下旬
体裁 228頁 四六判 上製
ブック・ケース入り
定価 3000円（税込）
発行 アートディズ
編集 大谷禮子

一
椀
の
新
茶
の
か
を
り
さ
わ
か
な
に



バックナンバー、追加注文の頒布価格、送料は次の通りです。
『みめぐみの』1冊の価格は200円(税込)です。

○1冊～4冊=送料及び振替手数料(70円)はご負担下さい

※送料 1冊=120円、2冊=160円、3冊=180円、4冊=210円

○5冊～9冊=送料は実費、振替手数料は不要です

※送料 5～6冊=210円、7～9冊=290円

○10冊以上=送料・振替手数料共に不要です

以上の要領で申し込みを受け付けます。折り込みハガキにご住所、氏名、電話番号をご記入下さい。ハガキに切手は不要です(ご住所には郵便番号をお忘れなく)。

みめぐみの 第31部

2007年11月5日 印刷
2007年11月10日 発行

定価 200円

著 者 大谷光道

発 行 みめぐみの刊行委員会

〒616-8432

京都市右京区嵯峨鳥居本北代町21
本願寺寺務所内

TEL.075(882)6262 FAX.075(882)6220

振替口座 01060-5-56990

印 刷 (株) 中 外 日 報 社



みめじみの刊行委員会刊